

ダロウェイ夫人のロンドン

—ヴァージニア・ウルフと『カーライル博物館』をめぐって—

*
中 尾 真 理

要 旨

『ダロウェイ夫人』は主人公ダロウェイ夫人が午後のパーティのために、一人で花を買いに行くところから始まる。この小説ではダロウェイ夫人を始め、もう一人の主人公セプティマス、ダロウェイ夫人の幼なじみピーター・ウォルシュ、ダロウェイ夫人の娘のエリザベスなど複数の人物の視点から描かれるが、これらの人物はいずれもロンドンを歩き、移動しているのが特徴である。この小説はジョイスの『ユリシーズ』同様、「歩く小説」であり、「ロンドンを歩く小説」だということが出来る。女性はいくつ最近まで、安全の上から、また、体面への配慮から、一人歩きができなかったことを考えると、ダロウェイ夫人が颯爽とロンドンの町を歩いている意義は大きい。

作者のヴァージニア・ウルフもダロウェイ夫人同様、歩くのが好きだった。ウルフのそうした一面は『ロンドン風景』という短いエッセイにも示されている。これはロンドンっ子の書いたロンドンの名所案内という趣の小品だが、フェミニストでもあったウルフの特質がよく現れている。

本稿では『ロンドン風景』中の第三章「偉人の家」の中からカーライル

の部分に焦点をあて、同じ題材をとりあげた夏目漱石の『カーライル博物館』と比較することでウルフの繊細な、女性らしい視点に着目した。漱石が「四角四面の家」と評したカーライルの家を、ウルフはカーライルその人ではなく、カーライル夫人に焦点をあてて見たのが注目される。

(一) ロンドンを歩く

ダロウェイ夫人は一人で花をかうわと言った。

Mrs. Dalloway said she would buy the flowers herself. (Mrs. Dalloway, p.1)⁽¹⁾

そう宣言して五二歳のダロウェイ夫人 (Mrs. Dalloway) は、六月のある晴れた朝、ウエストミンスターの自宅を出てロンドンの通りを颯爽と歩き始める。田舎の家に住んでいた一八歳の頃、窓をさっと開け放ち、朝、表に飛び出したことを思い出しながら。

『ダロウェイ夫人 (Mrs. Dalloway)』が書かれたのは一九二五年、

ヴァージニア・ウルフ (Virginia Woolf) がまだ四三歳の時のことだった。ダロウエイ夫人は午後には自分が開くパーティのために花を買いに行く。小説は街頭の様子、空のありさま、車や、街角に立ち止まって彼女を見送る人物など、その道筋の様子と彼女の反応を外面からも、内面からも、同時進行で描いていく。この小説にはもう一人セプティマス (Septimus) という第一次大戦で心に傷を受けた青年が登場し、ダロウエイ夫人の対極にある人物として、楕円の二つの中心のように、焦点をなす。両者は同じ日にロンドンの街を歩いたという以外に接点はなく、会うこともない。ちょうどジェイムズ・ジョイス (James Joyce) が小説『ユリシーズ』(Ulysses) (一九二二年) の中でステイヴン (Stephen) とブルーム (Bloom) という二人の男性にダブリンの街を歩き回らせたのと同じである。ジョイスは若いステイヴンと中年のユダヤ人の一日を描くことでダブリンの街を再現し、そこにアイルランドの歴史と、西洋文化の歴史のすべてを盛り込もうとした。ウルフの『ダロウエイ夫人』も、同じことを女性のレヴェルで試みた作品と言うことができる。

とはいえ、ウルフはジョイスのようにアイルランドの生まれではなかったから、『ダロウエイ夫人』は『ユリシーズ』ほど複雑で野心的な意図を持っているわけではない。その言語もウェストミンスターに住む、国会議員の妻ダロウエイ夫人にふさわしくシンプルで、リズムがあり、繊細な感性を表すものになった。自殺願望のあるセプティマスを対極に置いて、ダロウエイ夫人は人生を肯定的 (positive) に見

ており、美しいものに感動できる人として描かれている。

ダロウエイ夫人はウェストミンスターの自宅を出て、ピクトリア・ストリートを横切り、セント・ジェイムズ・パークを通り、ピカデリー・ストリートへ出て、ハッチャーズ書店 (Hatchards) のシヨウ・ウィンドウを眺め、ポンド街の花屋まで歩き、花を注文する。『ダロウエイ夫人』はダロウエイ夫人が一人で歩きたすところから始まり、その途中で見聞きしたこと、感じたことが描きだされる。夫人が見かけた自動車にセプティマスが足止めされると、そこから視点はセプティマスに移る。このようにして視点はセプティマスの妻ルクレティア (Lucretia)、ダロウエイ夫人の幼馴染ピーター・ウォルシュ (Peter Walsh)、娘のエリザベス (Elizabeth) と複数の人物に引き継がれていく。どの人物も歩き、移動している。そういう意味でこれは人びとがロンドンを歩くことによつて出来上がった小説とも言える。ペンギン版『ダロウエイ夫人』の本文の前に、ロンドンの市内地図がついているのは、読者に対する必要かつ親切な配慮である。『ユリシーズ』がダブリンを「歩く」小説であるように、『ダロウエイ夫人』はロンドンを「歩く」小説だと言ふことができる。²⁾

「私、ロンドンを歩くのが大好きなの (I love walking in London.)」ダロウエイ夫人は言った。

「ほんとうに、田舎を歩くよりいいわ」(Mrs. Dalloway, p.3)

ダロウェイ夫人の述懐はそのまま作者の真情でもあったようだ。ヴァージニア・ウルフはロンドンに生まれ、生涯のほとんどをロンドンで過ごした。彼女はロンドンを歩くのが大好きで、実際によく歩いていた。そうした一面は『オーランドウ (Orlando)』や『歳月 (Years)』などにもよく現れているが、『ロンドン風景 (The London Scene)』という短いスケッチにも示されている。これはロンドンっ子の書いたロンドンの名所案内といった趣の小品だが、その中にカーライルの家について独自の視点から書いている部分がある。フェミニスト・ウルフの本領が発揮され、『ダロウェイ夫人』を読む際の参考にもなると思われるので、まずそれをとりあげてみたい。問題にしたいのは『ロンドン風景』の第三章の一部である。

まず、『ロンドン風景』という作品について。

『ロンドン風景』は一九三一年十二月から翌一九三二年十月まで「グッド・ハウスキーピング (Good Housekeeping)」という女性雑誌(月刊)に連載された。全体は五章からなり、一章「ロンドンの港 (The Docks of London)」一章「オックスフォード街の人波 (Oxford Street Tide)」一章「偉人の家 (Great Men's Houses)」一章「アベイと大聖堂 (Abbeys and Cathedrals)」一章「マチュア下院 (マチュア下院) (This is the House of Commons)」とさう構成、ペンギン版だと全部で三四頁という小品である。『ロンドン風景』が並の観光案内でないことは言うまでもないが、とりあげられた場所は観光客もよく訪れる名所ばかりである。一章の「ロンドンの港」は、現在

なら、さしずめ、ヒースロー空港にあたる海外からの玄関口の描写である。二章では老舗の並ぶ「超高級ショッピング街」のボンド・ストリートとそれよりやや大衆的な「高級ショッピング街」オックスフォード・ストリートを比較している。永続を望まない中流クラスのショッピング街、「売り出しや特売があまりにも多すぎる」オックスフォード・ストリートの様子は、ウルフがこれを書いてから七〇年たった現在でも彼女が見た通りの活況にあつて、その観察眼の鋭さには恐れ入る。三章がこれから取上げるカーライルの家を扱った章で、題して「偉人の家」。これはイギリス名物、ブライク (plaque) と呼ばれる青い陶製の円い案内板をはめた、偉人ゆかりの建物の訪問記である。訪れたのはチェルシーにあるトマス・カーライル (Thomas Carlyle) の家と、ハムステッドにある詩人ジョン・キーツ (John Keats) の家である。四章「アベイと大聖堂」はロンドン観光の名所、ウェストミンスター大寺院とセント・ポール大聖堂を、五章「こちら下院でございます」では国会議事堂 (ウェストミンスター・ホール) を訪れている。

(二) 激石の「カーライル博物館」(一九〇五年)

ウルフは『ロンドン風景』の三章「偉人の家」でカーライルの家の訪問記を書いた。トマス・カーライル (Thomas Carlyle) は一八三四年から亡くなる一八八一年まで、当時はロンドン郊外であったチェル

シー (Chelsea) のチェイン・ロウ二四番地 (24 Cheyne Row) に住んでいた。この家はその後、カーライルが住んでいたままを展示する博物館として、見学者に公開され、現在に至っている。観光地図や観光案内所に「カーライルの家 (Carlyle's house)」と記載されているのがそれである。

カーライル (一七九五—一八八一年) は十九世紀に多大の影響を与えた作家で、マーガレット・ドラップル (Margaret Drabble) 編『オックスフォード英文学事典 (The Oxford Companion to English Literature)』⁽⁴⁾によると「彼の存命中、社会の預言者、社会批評家としての影響力、歴史家としての名声は計り知れないほど大きかった」と言う。ジョージ・エリオット (George Eliot) は一八五五年に雑誌『リーダー (The Leader)』(一八五〇年)にG. H. LewesとT. L. Huntが創刊した週刊誌)の中で、「この世代の知識人、文化人で、およそカーライルの著作によって影響を受けた者は一人もいない」と述べている。⁽⁵⁾二〇世紀になってその影響力は薄れ、今では「衣装哲学 (Savor Resartus)」「フランス革命 (The French Revolution)」などの著作の名と過去の名声によって記憶される程度で、英文科の学生でもカーライルを読むことはあまりないと言ってもいいだろう。しかし、かつてはそうではなく、わが国でも新渡戸稲造や内村鑑三はカーライルの愛読者であった。慶応三年 (一八六七年) 生まれ、一八九〇年 (明治三年) から一八九三年 (明治六年) まで東大で英文学を修めた夏目漱石の時代には、カーライルの存在は大きかったのである。

漱石は明治三十二年十二月二日付けの正岡子規宛ての手紙に「此休みには「カーライル」の論文一冊を読みたり」と書き送っている。⁽⁶⁾「吾輩は猫である」の中では苦沙弥先生が迷亭に「君の説は面白いが、あのカーライルは胃弱だったぜ」と言っている。⁽⁷⁾カーライルの名が当時の高校や大学で英語を学ぶ日本人の間でよく知られていたことは、同じ『猫』の中で迷亭の語るカーライルの逸話に、理系の寒月君が「カーライルの事ならみんなが立つて、も平氣だったかも知れませんが」と口をはさんでいることから想像がつく。このような状況下で、イギリスに留学した漱石が二年あまりのロンドン滞在中に、カーライルの家を訪ねたとしても不思議ではない。その時の様子を漱石は「カーライル博物館」という作品に書いている。ウルフの『ロンドン風景』に移る前に、漱石の「カーライル博物館」をのぞいて見ることにしよう。

漱石がカーライルの家を訪ねたのは、一九〇二年 (明治三十四年) 八月三日のことだった。漱石の脳裏には「古ぼけた外套を猫背に着た爺さん」然とした「村夫子」のカーライル、「チエルシーの哲人 (セージ)」と言われたカーライルの姿が浮かんでいた。テームズ川の南、クラバム・コモン (Clapham Common) に下宿していた漱石は、毎夕、川向こうに見えるチェルシーの街並を眺めていたが、ある日、意を決して橋を渡り、「チェイン、ロー二四番地」にあるカーライルの「有名なる庵」を訪れた。哲人の庵といえは、いかにも瀟洒な家のように思われるが、カーライルの家はそんな風流なものではなかった。

「往來から直ちに戸が蔽けるほどの道傍に建てられた」四階建ての「煙突の如き」真四角な建物である。

是が彼が北の田舎から始めて倫敦へ出て来て探しに探し抜いて漸々の事で探し宛てた家である。彼は西を探し南を探しハンブステッドの北迄探し終に恰好の家を探し出す事が出来ず、最後にチエイン、ローへ来て此家を見てもまだすぐに取極める程の勇氣はなかつたのである。四千萬の愚物と天下を属つた彼も住家には閉口したと見えて、其愚物の中に當然勘定せらるべき妻君へ向けて委細を報知して其意向を確かめた。細君の答に「御申越の借家は二軒共不都合もなき様被存候へば私倫敦へ上り候迄双方共御明け置願度若し又それ迄に取極め候必要相生じ候節は御一存にて如何とも御取計らひ被下度候」とあつた。カーライルは書物の上でこそ自分獨りわかつた様な事をいふが、家を極めるには細君の助けに依らなくては駄目と覚悟をしたものと見えて、夫人の上京する迄手を束ねて待つて居た。四五日すると夫人が来る。そこで今度は二人して又東西南北を駆け廻つた揚句の果矢張チエイン、ローが善いといふ事になつた。(「カーライル博物館」三五―六頁)⁹

「四千萬の愚物と天下を罵つた」哲人も、家探しには苦勞するなど、日常のレヴェルでは常人と変らなかつたところに、漱石は親近感を抱いたようだ。

さて、六ペンスの入場料を払って、漱石は「五十恰好の肥つた婆さん」の案内で、「何年何月何日」という妙に熟練した口上を聞きながら、一階の客間から、二階の居間、三階の寢室を見学した。さらに四階に上がってカーライルが建て増した屋根裏の書齋、そこからまた下に降りて地下の台所を見たのち、最後に勝手口から十坪程の庭に出て見物を終えた。書棚の本には特に関心を抱き、「六づかしい本がある。下らぬ本がある。古びた本がある。讀めそうもない本がある」と見て廻り、「勘定したら百三十五部あつた」とその冊数を数えている。他人の書齋を覗いてみたいという好奇心に、同じ文学者としてのライヴアル意識が手伝つた結果だろう。二階では窓から度々首を出し、カーライルの書いた通りの眺めが得られるかどうかを確かめている。三度首を出してみたが、カーライルの言う「茂る葉」「青き野」は見えず、「倫敦の方」を見ても、「幻の如き殿宇は煤を含む雲の影の去るに任せ」よく見えなかつた。「千八百三十四年のチエルシーと今日のチエルシーとは丸で別物である」ことを確認したわけである。

漱石が最も興味を持ったのは四階の書齋だつた。四階の屋根裏にあがつた時には「纏綿として何事とも知れず嬉しかつた」とその時の気持ちを述べている。この四階は胃弱と癩癩に悩むカーライルが、地上の騒音を逃れて著作に没頭するために、「二千圓の費用にて先づ／＼思ひ通りに」作つた書齋である。ところが苦勞してこしらえたにもかかわらず、この書齋に立籠もつて見て、カーライルは「始めてわが計畫の非なる事を悟つた」という。屋根裏の書齋は「夏は暑くて居りに

く、冬は寒くて居りにくい」。おまけに地上の騒音からは逃れたが、地上にいる時は思いもよらなかつた「寺の鐘、汽車の笛」など遠くから聞こえる騒音が「呪の如く彼を追ひかけて番の如くに彼の神経を苦しめた」という。ここでも漱石は「哲人」カーライルの折角のアイデアが、実際の知識が乏しいために、アイディア倒れの滑稽な結果に終わったことに関心を持ち、同情を感じている。「吾輩は猫である」に、苦沙弥先生が昼寝もできる、寝台を兼ねた大きな机を考え出し、「近所の建具屋に談判して」こしらえてはみたものの、いざ出来上がつて寝てみたら、寝返りを打った拍子に転がり落ちてしまい、見事失敗に終わったというエピソードがある。カーライルの屋根裏の失敗と同じである。

(三) ヴァージニア・ウルフの「カーライルの家」

「ロンドン風景」を書くために、ヴァージニア・ウルフが同じチェイン・ロウ二四番地の「カーライルの家」を見学したのは、漱石がカーライル博物館を訪れてから三〇年ほど後の一九三二年三月のことである。カーライルの家の住所は漱石の時も、現在も二四番地になっているが、もとはチェイン・ロウ五番地であつたため、ウルフは「五番地」と書いている。ロンドンには偉人の家が多いが、それらは家具調度もそのまま保存され、公開されている。そうした家を訪ねると伝記を読むよりも明瞭に作家の人となりがわかるとウルフは言う。

今度はウルフの「ロンドン風景」第三章から「カーライルの家」の部分を見ることにしよう。案内人に従つて一階から四階へ上がった漱石とは異なり、ウルフはまず階下の台所から見てまわる。彼女は台所へ降りて、「二秒後に」その家には水道が引いてないことに気がついた。カーライル家の台所には井戸があり、水はその井戸からポンプで汲み上げなければならなかつた。しかも湯を沸かすのは「だだっ広くて無駄の多い旧式な炉 (the wide and wasteful old grate) なのである。ウルフは言う。

水道も、電灯も、瓦斯燈もなく、書物が一杯で、石炭の煙と、柱つきベッド、マホガニーの食器棚のある背の高い古い家だ。この家で当時最も神経質で、厳格な人が二人、来る年も来る年も、たったひとりの不運なメイドを使って暮らしていた——。

(The London Scene, p.118)

漱石がカーライル博物館を訪れた第一印象は、四角四面の殺風景な家であつたが、ウルフの観察はより具体的である。カーライル夫妻がなぜ、漱石のいう「四角四面に暮らさ」なくてはいけなかつたか、その理由をウルフは次のように解き明かしている。

——しかも、彼らはスコットランドの人間であつた。

(The London Scene, p.118)

スコットランド人は質実剛健で忍耐強いが、潔癖なまでの清潔好きでも有名である。ヴィクトリア朝時代は石炭を家庭燃料にしていたため、住居を清潔に保つだけでも主婦には重労働だった。しかも室内の調度は、馬毛織りのカウチも、客間の壁紙も、腰板のニスもすべて、カヴァーを架け替え、拭き清め、繕い、磨き上げる必要があった。そのうえ夫妻とも勤勉で、清潔好きなスコットランドの人間である。ウルフは言う。

かくしてチェイン・ロウ五番地は住居というよりはむしろ戦場であった——努力と努力、絶え間ない奮闘の場所であった。(Thus number 5 Cheyne Row is not so much a dwelling-place as a battlefield — the scene of labour, effort and perpetual struggle.) (*The London Scene*, p.119)

ウルフがこの章の冒頭でまず言い切ったのは、家を見ればその作家がわかるということだった。ウルフの見るところ、チェイン・ロウ五番地の家は、季節で言えば「いつも二月 (always the month of February)」であり、そこに満ち満ちている声は——すべての家には声があるとウルフは言っている——うめき声 (goring) なのだった。地下の井戸のきしむ音、床を「ごしごし」と擦る音、掃除する人のうめく声、暗い家の中にこだまする。漱石が関心を持った四階の書斎からも、うめく声は聞こえてきた。

屋根裏では天井の明かり取り窓の下、馬毛織りの布を張った椅子で、歴史と格闘しながら、カーライルがうめいていた。その間も、ロンドンの灯は黄色い光線となって彼の書類の上に降り注ぎ、手風琴の音、呼び売り商人の粗野な叫び声が壁を通過して響いてきた。壁は厚さこそ倍の厚みがあつて音が歪んで聞こえるのだが、決して騒音をかき消してはくれなかったのである。

(*The London Scene*, p.118)

漱石が「四角四面の家」と評したこの家の堅苦しさは、こうした生活上の不便に起因するものであったのだ。ウルフが「二秒で」見抜いたごとく、この家では入浴でもしようと思えば、まず水を井戸から汲みあげ、効率の悪い炉で湯に沸かし、バケツに入れて、メイドの手で、地下から三階の風呂桶に運びあげなければならなかった。

この風呂桶については漱石も触れているので引用してみたい。漱石はカーライルの寝室の隣にある風呂桶を見て、「風呂桶とはいふもの、バケツの大きいものに過ぎぬ。彼が此大鍋の中で倫敦の煤を洗い落としたかと思ふと益其人となりが惚ける。」(「カーライル博物館」三九―四〇頁)と書いている。だが、その珍妙な形に目を止め、漠然と違和感を感じてはいるものの、漱石は裏方の苦勞にまでは思いおよばなかった。チェイン・ロウに水道もガスもないということは、一見、ささいな事実であり、カーライルの伝記作者の J・A・フルード (J.A.Froude)⁽²⁾ が見え逃していた事実だが、それが実は「はかり知

れないほど重要 (and yet was of incalculable importance) などなのだ」とウルフは述べている。

(四) カーライル夫妻

カーライルはエディンバラ大学に学び、初め聖職を志したが、啓蒙運動の影響を受けて方針を変え、文筆生活に入った。初めは苦勞したがなんとか作家として立つようになると、ロンドンに出て、「フランス革命 (The French Revolution)』(一八三七年)で作家としての地位を確立した。彼は「自由放任経済 (laissez-faire)」「功利主義」を攻撃し、「民主主義」に警鐘を鳴らし、中産階級意識に反逆した。その筆は容赦なく激しいもので、漱石が「四千萬の愚物と天下を罵った」と評した通りである。社会の現状を憂い、少数派であることを恐れなかったアウトサイダーのカーライルだが、その著作に親しんでいた漱石は、⁽¹⁵⁾痼癩持ちで胃弱という共通点もあって、警世家としてのカーライルに親近感を抱いていたと思われる。ロンドン留学中、ロンドン塔へは一回しか行かなかった漱石だが、カーライル博物館へは四度も足を運び、⁽¹⁶⁾特にカーライルの蔵書は興味を持って眺めたようで、チェイン・ロウニ四番地の家に保存してあった蔵書計三一九冊を、置いてあった階ごとに分けて一覧表にし、「カーライル博物館」(明治三八年一月十五日)の統編として「学燈」(明治三八年二月十五日)に発表しているほどである。⁽¹⁷⁾

ところで、これほどまでにカーライルに関心を寄せた漱石だが、その彼も気づかなかったと思われることがある。四階建ての家にガス水道のない不便さについて漱石が思い及ばなかったらしいことについては、前に述べた通りだが、いまひとつ、ウルフが述べていて漱石が述べていないことがある。カーライル夫人の存在である。「四千萬の愚物と天下を罵った」カーライルが、住む家に苦勞し、チェイン・ロウに居を定めるにあたっては、「其愚物の中に當然勘定せらるべき妻君」に相談をもちかけたことを、漱石は同情的に、また揶揄するよう書いていた。だが、『ロンドン風景』で、ウルフは居間に飾られているカーライル夫妻の写真を見て、「夫も妻もどちらも才能に恵まれていたと考えている。そしてその才能に恵まれた夫婦が、しかも「お互いに愛し合っていた」にもかかわらず、なぜ快適な生活をおくれなかったのかと考えこむ。ウルフはカーライル夫人を愚物とは思っていないからである。

カーライル夫人、ジェイン・ベイリー・ウエルシュ (Jane Baillie Welsh Carlyle) (一八〇一〜六一年) の名は、ウルフの父レズリー・ステイーヴン (Leslie Stephen) が編集した『英国人名辞典 (The Dictionary of National Biography)』(一九二九年)にも収録されている。しかし、カーライル夫人の項を見てもそこには何も書かれておらず、説明は夫カーライルの項を見よとなつてゐる。『英国人名辞典』はもともと女性の記述が少なく後で補遺が出たほどなのだが、M・ドラップル編の『オックスフォード文学事典』(一九八四年)には、さ

すがにカーライルに先立ってジェイン・ベイリー・ウエルシュ・カーライルの項が独立した形で掲載されており、かなり詳しい説明がされている。

それによると、カーライル夫人は意志の強い人で、少女の頃から美人で才女の誉れが高かった。家庭教師であったカーライルとは、共にドイツ文学を勉強した仲である。癡癖の強いカーライルをなだめ、励ましたのは彼女だった。夫の友人である文人たちとも交流し、辛らつでウィットに富む手紙を数々残した。夫人の死後、カーライルはその書簡集を公開したが、それによって個性の強い二人が度々衝突したと、著作に没頭するカーライルの傍らで子供のない夫人はしばしば孤独であったことが明らかになった。カーライル夫人ジェインの名前は、カーライルへの内助の功と共に、卓越した手紙の書き手としても英文学史上に記憶されている。

「あのカーライル」の夫人に焦点をあてるなど、漱石には思いも及ばなかった視点ではないだろうか。女性であるウルフは半地下の台所にあつた井戸を見、効率の悪い炉と三階にある風呂桶を見て、この家をとりにくく潔癖で勤勉で厳格な雰囲気と結びつけ、カーライル夫妻の肖像画とも合わせて、哲人ではなく、その蔭にあつて哲人を支えた夫人の生活を想像してみることができた。

そんな風に長い眠れぬ夜は過ぎていき、それから上でカーライルが身動きする音を（夫人は）聞きつける。彼女は息をひそめ、

ヘレン（メイドの名）はもう起きて火をおこし、髭そり用のお湯をわかししたかしらと思うのだ。また一日が始まり、ポンプで水を汲み、こしこし磨きあげる作業が始まるのだ。（括弧内は筆者）

(The London Scene, p.119)

夫人の健康がすぐれず、晩年は頭痛と咳の発作に悩まされながら主婦役をこなしていたこともウルフは知っていた。¹⁹だから、もし、浴室に温水と冷水の出る設備があり、寝室にガス・ストーヴがあれば、夫婦の口論の半分はしなくても済んだのではないだろうか、チェイン・ロウでのカーライル夫妻の生活はずっと楽になったのではないだろうか、とウルフは考えたのだ。

同じ「カーライルの家」を見学した漱石とウルフのこの視点の違いは何故だろうか。おそらく、多感な青年時代からカーライルには親しんでいても、漱石はカーライル夫人のことを詳しくは知らなかっただろう。それに対し、ウルフの方は一八三三年に出版されたJ・A・フルード編の書簡集、一九二四年に出版されたレナード・ハックスレー (Leonard Huxley) 編の書簡集の存在を知っていた。²⁰だから、前述の引用のように、眠れぬ夜を過ごした後、未明にカーライル夫人がベッドの中で、咳の発作を押さえながら、朝の家事の段取りを考えているところを描くことができたのだ。

しかし、たとえ「書簡集」を読んでもいなくても、直感の鋭いウルフなら、チェイン・ロウの家の住みにくいことはすぐに見抜いていただ

ろう。カーライル夫妻の写真を見れば、妥協できない性格もその家庭生活が戦場であったことも見抜いたのではないだろうか。女性であるウルフは直感力に秀でていた。明治の男性であった漱石はチェイン・ロウの家を見て「あのカーライル」が質素に、「四角四面に暮らした」ことに感銘を受け、細君の用いた「頗る不器用な飾り気のない」寝台や、「不器用で素朴としかいえないようなない」カーライルの寝台、「九鼎の如」き風呂桶に好感を持った。だが、その舞台裏の苦勞までは思及ばなかったのだ。さすがに、カーライルのデス・マスクを見上げた時は、「此炬燵槽位の高さの風呂に入つて此質素な寢臺の上に寝て四十年間八釜敷い小言を吐き續けに吐いた顔は是だと思ふ」と思ったが、そのやかましい夫と生活を共にした夫人のことまでは考えなかった。

(五) 漱石のロンドン

一九〇〇年十一月から一九〇二年十二月までロンドンに留学していた夏目漱石は、まだ地理のよくわからない始めのころ、大都会ロンドンの雑踏に圧倒され、出歩くのに苦勞した。外国人が知らない土地を歩くのに不自由はつきものだが、漱石の場合、江戸っ子で都会には慣れていたとはいえず、明治の日本から当時世界第一の先進国イギリス、その首都にいきなり飛び込んだのだから無理もない。

恐々ながら一枚の地圖を案内として毎日見物の為め若しくは用達の為め出あるかねばならなかった。無論汽車へは乗らない、馬車へも乗れない、減多な交通機關を利用仕様とすると、どこへ連れて行かれるか分からない。此廣い倫敦を蜘蛛手十字に往來する汽車も馬車も電氣鐵道も鋼條鐵道も余には何等の便宜をも與へることができなかつた。(「倫敦塔」五―六頁)

と、その様子を「倫敦塔」の冒頭に書いている。「減多に交通機關を利用仕様とすると、どこへ連れて行かれるか分からない」というありさまでは、街歩きを楽しむどころではなかつただろう。

とはいうものの当時の「日記」を見ると、漱石はロンドンに到着して以来、実によく出歩いている。とりわけ名所旧跡、美術館、劇場、書店には到着直後からよく足を運び、特に芝居見物や公園の散策を楽しんでいる。一方で英国での生活と英国人には、当然ながら違和感を抱き、煤煙のすさまじいこと、天候のよくないことに驚いている。漱石がロンドン入りをしたのは十月の二八日、晩秋から冬に向かう陰鬱な時期だったのも災いしたようだ。漱石は天候に影響されやすい、敏感な性質の人だったようで、手紙や日記には天候への言及が多い。

漱石はカーライル博物館には「四たび此家に入り四たび此名簿に余が名を記録した覚えがある」と書いている。漱石がカーライル博物館を最初に訪れたのは八月なので、気候に恵まれ印象がよかつたのかもしれないが、それだけでは四回も訪れた理由にはならないだろう。ク

ラバム・コモンの下宿から遠くなかったこともあるが、他にも理由がありそうである。漱石がこのころ主にロマン派の詩を研究していたことを思えば、ハムステッドにあるキーツの家にも出かけそうなものだが、実際はそうではなかった。⁽²¹⁾

漱石は「卑しきこと」「下品」であることを憎み、「風雅の心」⁽²²⁾「風流閑雅ノ趣」⁽²³⁾を求める気持ちが強かった。その漱石にとって留学中の生活はもとより、日本においてさえも「風雅の心」を実践することは容易ではなかった。そうした彼にとって、粗末な家に住み、天井裏の冬は寒く夏は暑くて住み難い書齋で、世間の騒音に悩まされながら「四八年間小言を吐き続けた」カーライルの生き方は、同じく住み難い世の中で文学を志す自分自身のありかたと重なったと思われる。留学中の漱石はまだ三三、四歳で「自己本位」という境地にも達しておらず、社会的にも満足できる地位を得たとは言えなかった。二年間の留学でなしうることについては漱石も合理的に割り切っていたが、⁽²⁴⁾ 乏しい留学費用を削って書籍を買い集める一方で、英文学者としての研究のこと、英語教師としての帰国後の地位や職のこと、東京に残してきた妻や家庭のこと、果ては日本の現状と将来を愁う気持ちなど、気がかりなことは多かった。東京の妻鏡子宛の手紙を見ると、子供の養育のしかた、鏡子の入れ歯のことや朝寝のことなど細かなことに、まるで彼自身カーライルのごとく、まさに「小言を吐き続けに吐」きたような状態だったのである。

(六) ダロウェイ夫人のロンドン

地図を頼りにおそるおそる歩いた漱石とは異なつて、ロンドンっ子のウルフはロンドンの雑踏を歩くのを楽しんでた。そうした楽しみは『ロンドン風景』以外にも『ダロウェイ夫人』や『歳月』、少し趣を変えて『オーランドウ』で主人公がロンドンの街を歩く場面などにも描かれている。ウルフにとってロンドンを歩くのは新鮮な発見の連続だった。『ダロウェイ夫人』でも、歩いている時のダロウェイ夫人の気分は驚きと賛嘆の入り混じったものである。この作品では病後の夫人の軽快な気分、戦争が終わったという世間の安堵感、パーティーを目前にした期待感(ダロウェイ夫人はパーティー好きなのだ)が一体になって軽やかな上昇気分を盛り上げている。『オーランドウ』では歴史という軸に沿ってロンドンを眺めているが、過去を知っているオーランドウの目にロンドンの町は常に新鮮で驚きに満ちた光景として映っている。さて、『ロンドン風景』ではウルフ自身が、よく知られた見慣れた風景を、女性の視点から捉え直したと言える。だが、依頼されて書いた連載原稿とは違い、制約の少ない小説にはウルフの歩く喜びがより素直に伝わってくるようだ。たとえば、ダロウェイ夫人の伸びのびとした歩き方を見よう。ウエストミンスターに住む国会議員の妻、パーティー好きで、高級ショッピング街ポンド・ストリートに心奪われ(p.8)、「直感で人を見分けることが私の唯一の才能 (Her only gift was knowing people almost by instinct)」(p.6)と

いうダロウエイ夫人は、地位から言っても性格から言っても、カーライル夫人の対極にあるような女性である。季節で言えば「いつも二月」という粗末なチェイン・ロウの家に住んでいたカーライル夫人と、六月の朝に軽やかに歩き出すダロウエイ夫人とは、同じウルフが描き出す女性であっても、読者に与えるイメージは大きく異なってくる。ポンド・ストリートの贅沢な花屋へ出かけたダロウエイ夫人はその店先で「どこかの病院へお出かけになる女王さま、バザーの開会式に出席される女王さま (The Queen going to some hospital: the Queen opening some bazaar)」(p.13) の自動車 (motor car) を見かける。

これは明らかに、ジョイスの『ユリシイズ』第十挿話で病院への基金を募るバザー (マイラス・バザー、Mirus bazaar) に出席したアイランド総督の馬車の通過する様子が描かれているのを意識した趣向だろう。『ダロウエイ夫人』では「女王さま」の自動車はやがて大勢の人に目撃されながら、バッキンガム宮殿の門内に入り、その後、空にはお菓子の宣伝をする小型飛行機が現れる。『ユリシイズ』第十三挿話ではバザーの余興として花火が打ち上げられるが、「ダロウエイ夫人」では花火の代わりに、飛行機が青空に雲々「TOFEE」の文字を描くのを、人びとが心奪われつつ見上げるのである。こうしたエピソードはすべてダロウエイ夫人の軽やかに飛翔する心理状態を表すのに役立つ。花を買いに行つて偶然、女王さまの車を見かけ、当時としては珍しい飛行機の宣伝飛行を見る。偶然とは言え、それは祝祭気分にあふさわしい偶然である。もちろん、ダロウエイ夫人にも「もはや太

陽の熱も、冬のきびしい寒さも恐れるにあたわず (Fear no more the heat o' the sun/ Nor the furious winter's rages)」と「シンベルリン (Sybeline)」の中の死者を哀悼する詩句を口ずさむ瞬間があり、競争で心に傷を受けたセプティマスという青年が自殺するエピソードも一方で進行しているわけだから、この作品に死や下降気分を暗示させるものがないとは言えない。しかし、ダロウエイ夫人が、カーライル夫人とは別世界の自由なのびやかさと、軽やかな上昇気分を感じていることがこの小説の眼目なのである。

(七) 女性がロンドンを歩くとき

というのも、女性が町を歩くということは実は、そう簡単なことではなかったのである。『ダロウエイ夫人』(一九二五年)の三年後に書かれた『オーランドウ』(一九二八年)では、自由な冒険家オーランドウが、時代に合わせて男性から女性に変身しているが、それは女性が思うままに行動することの困難だった時代が多かったためだろう。つかの間の行動の自由を得るために、多くの女性が男装をした事実がそのことを裏づけている。二〇世紀に至るまで女性が一人歩きをすることは、それ自体、たやすいことではなかった。ひとつには公共交通機関が発達していなかったことがあげられる。安全面の問題と社会通念の問題もあった。例えば、一九世紀の初めにロンドン近郊のハンブシャーに暮らしていた作家ジェイン・オースティン (Jane Austen)

の作品を読むと、ジェントリー階級の女性にとって外出や旅行がいかにままならぬものであったかがよくわかる。遠方への外出には自家用の馬車が必要だった。オースティンはロンドンやケント州に住む兄の家をしばしば訪れているが、その場合、兄たちが旅行をする馬車と一緒に乗せてもらうか、特別に馬車を用意してもらうか、あるいは付き添ってもらう必要があった。オースティンは自家用馬車を持つておらず、⁽²⁶⁾ といって駅馬車で女性のひとり旅は考えられなかったからである。乗合の駅馬車を使った女性の一人旅は、危険でもあり、体面上の問題からためらわれた。馬車を使う必要のない近距離の場合、一マイル以下なら徒歩で行くが、その場合も、よほどのことがない限り女性の一人歩きはしなかった。安全面からも女性の一人歩きには問題があったのである。オースティンの作品を読むと、女性が一人でなんら差し支えなく自由に行き来できる範囲は四分の一マイル(約四百メートル)から二分の一マイル(約八百メートル)で、それ以上になると二人以上で連れ立って歩くか、男性の同伴者がいるのが普通だった。⁽²⁷⁾ 若い女性の場合は特に、体面の問題が重視された。『自負と偏見 (Pride and Prejudice)』(一八二三年)では主人公のエリザベス・ベネット (Elizabeth Bennet) が三マイル離れた隣家を歩いて訪問したことが議論を呼び、「淑女らしくない」と非難されている。このエピソードは後にエリザベスと、彼女に對峙するダーシー氏の身分違いの恋が成就する際に大きな障害となるのである。平和な田舎といえども、若い娘が三マイルもの距離をひ

とり歩きするのは、異例の行動と見なされたのだ。もともと一マイル以下の距離で、女性が若くない場合は、一人で歩いても問題はなかったようである。また、安全面から言えば、田舎よりかえって都会のほうが女性の一人歩きには適していたようで、同じオースティンでも、小都会バース (Bath) を舞台にした『ノーサンガー・アベイ (Northanger Abbey)』(一八一八年)や『説得 (Persuasion)』(一八一八年)では、若い女主人公がショッピング街を比較的自由に、ひとり歩きしている。バースは有名な保養地で人通りも多かったうえ、比較的狭い地域であったためにそういうことが可能になったのだろう。汽車が走り始め、鉄道によって遠距離への移動が可能になった後で

も、事情はたいして変らなかつた。エリザベス・ギヤスケル (Elizabeth Gaskell) の『北と南 (North and South)』(一八五五年)という小説には牧師の娘のマーガレット (Margaret) が北の新興産業都市ミルトン (Milton, 実はManchester) で身につけた一人歩きの習慣を、ロンドン在住の伯母に認めてもらえないという場面がある。ミルトンからロンドンへ引き上げる段になって、知人に暇乞いをする際も、マーガレットは伯母の付き添いのもと、馬車で訪問しなければならなかつた(四三章)。また父親代わりのベル氏 (Mr. Bell) が危篤で、ロンドンから鉄道でオックスフォードへ駆けつける際も、その日のうちに戻ってくるだけなのに、男性の付き添いをつけられた(四八章)。以上のエピソードはいずれもヒロインに差し迫った必要があつて外出する場合なのである。まして、さしたる用事もなく女性がひとりそ

ぞろ歩きを楽しむなど、論外であっただろう。

交通機関の発達によって、女性の一人歩きも夢ではなくなった。ロンドンではユーストン駅（一八三八年）を皮切りに、バディントン駅、ヴィクトリア駅など鉄道の駅が次々と開業し、各地方都市との間を結んだ。一八六三年には地下鉄も開通し、始めのうちこそ蒸気機関車に窓のない客車を連結するといった、およそ若い女性が乗るにはふさわしくない乗り物だったが、一八九〇年には最初の電気による地下鉄が走り、その後、次第に設備を近代化し、路線を広げて行った。二〇世紀に入ってから女性の外出も危険なことではなくなった。乗り合い馬車（オムニバス、omnibus）も徐々に馬車から自動車に切り換わり、乗合自動車（バス、omnibus）が走り始めた。「ダロウエイ夫人」には女王さまの乗った自動車が重要な役割を果たし、乗合自動車のオムニバスも走っていて、ダロウエイ夫人も乗っている。幼なじみのピーター・ウォルシュと一緒に二階建てバスに乗ってロンドンを行くのは、ダロウエイ夫人にとって探検のようなものであったという（p.124）。ダロウエイ夫人の娘のエリザベスになると、ひとりではバスに乗ってストランド街（フリート街を経てシテイへ続く繁華なビジネス街）を行きながら、自分も職業についてみたいと考えている（p.121）。都市での公共交通機関の発達は女性の一人歩きを保証するだけでなく、女性の社会進出をも支えたことは改めて言うまでもない。

（八）歩く小説

新鮮な空気を吸いながら田舎を歩くのは快適に違いないが、さし迫った用事なしに都会の雑踏を歩くのも、それに劣らない快楽である。そうした楽しみはいろいろな作家がさまざまな作品の中で書いてきた。読者にとつても、例えばロンドンのようによく知られている町の、読者が実際に行ったり書物で読んで知っている場所を、作品の中で確認するのは嬉しい読書体験となる。街を歩く視点はこれまでもさまざまあり、官吏サミュエル・ピーブスの抜け目のない目、ディケンズの子供のような視点、R・L・ステイブンソンの怪奇ロマンの視点など、枚挙のいとまがない。しかし、女性の視点というのはあまり例がなかった。女性は元来、家に留まっているものであり、旅行や移動をしないものだったからだろう。ウルフはそうした概念を打ち破り、歩く女性を描こうとした。歩くことによって女性は見聞を広め、その世界を拡大していくからである。ウルフは「ダロウエイ夫人」に意識的に女性の視点を取り入れ、ダロウエイ夫人、娘のエリザベス、その家庭教師ミス・キルマン、セプティマスの若い妻でイタリア人のルクレツィアの四人の女性の視点から描いている。

最後に、ジョイスやウルフの小説で主人公がよく歩いていることについてもう一つ指摘しておきたい。ステイヴンやブルームやダロウエイ夫人が地図にあるとおりの道筋を一步一步、歩くのは、歩くという行動の間に思い出したり、考えごとをするためである。読者もまた

その道筋に従って、彼らの考えたことを再現することが可能である。人は歩くことによって思考に適したリズムを得る。同時に、作者は主人公を歩かすことによって時間の経過を読者に知らせることもできた。『ユリシーズ』や『ダロウエイ夫人』では要所要所で教会の時鐘が鳴ったり、主人公が時計を見たりすることによって読者に時が知らされる。すべてを掌握した語り手がないこれらの小説では、作品の世界に秩序を与えるために、こうした工夫が必要なのだ。時間を告げる鐘と歩いている位置を知らせる地図、この二つを頼りに読者は「語り手」というガイドなしに作品世界の中に踏み出してゆく。「ダロウエイ夫人」はこの試みが見事に成功した例と言えるだろう。

五一歳の、国会議員の妻のダロウエイ夫人が花を買う以外にたいした用事もなく、ロンドンを一人で歩けるようになるまでには、長い歴史と準備が必要だった。ウルフは「自分一人の部屋 (A Room of One's Own)」（一九二九年）という随筆で、女性が自立するには年五〇〇ポンドの収入（経済的自立）と一人になれる部屋（精神的・行動的自立）が必要だと述べている。歩くという行為は、行動の自由を意味するだけでなく、自分の責任において行動し、考えることを意味している。その意味で、女性の一人歩きには「自分一人の部屋」を持つと同じ重みがあると言ってもよい。『ダロウエイ夫人』は確信的なフェミニストであったウルフらしい作品だと言えるだろう。

以上のことを考えると、街を歩くダロウエイ夫人を創造する際に、カーライル夫人のような生活を意識することは、ウルフにとって是非

とも必要なことだった。我々読者にとっても、囚われた女性、カーライル夫人の視点から社会を見るといって、貴重な体験を『ロンドン風景』は与えてくれるのである。

注

- (1) Virginia Woolf, *Mrs. Dalloway, The Definitive Collected Edition* (Hogarth Press, 1990).
- (2) *Ulysses*→*Mrs. Dalloway*は幾つかの共通点を持つてゐる。一九〇四年六月十六日のダブリンを、通りや店の名前などはほぼ実名で再現してみた。Ulyssesに対して、ウルフは一九二五年乃至それより少し以前の年の、同じ六月のある一日のロンドンを、同じように、通りや店の名を実名で再現してみせている。ウルフはジョイスを常に意識していた。ジョイスとウルフは同じ一八八二年生まれの一九四一年没である。
- (3) Virginia Woolf, *The London Scene, The Crowded Dance of Modern Life: Selected Essays* vol. II (Penguin Books, 1993). 同じく深沢俊他編注『The London Scene: Five Essays of Virginia Woolf (ロンドン情景)』（北屋堂書店、一九八三年）
- (4) *The Oxford Companion to English Literature*, ed. by Margaret Drabble, Revised Edition (Oxford University Press, 1995).
- (5) *The Oxford Companion to English Literature*, see Thomas Carlyle.
- (6) 夏目漱石全集第一四巻書簡集（岩波書店、昭和四一年、昭和五一年）十一頁。
- (7) 夏目漱石全集第一巻「吾輩は猫である」三三四～三五頁。
- (8) 「吾輩は猫である」五〇五頁。

- (9) 夏目漱石全集第一巻「カーライル博物館」三五―六頁。
- (10) 「学燈」に発表した「カーライル蔵書目録」(岩波書店「夏目漱石全集」第一六巻別冊)によると、カーライルの家の蔵書は全部で三一九冊あったことになっている。従って二三五部というのは、二階におさめられていた蔵書の数と思われる。
- (11) この家の家賃は年額三五ポンドであったが、漱石はそれを三五〇円であつたと書いている(『カーライル博物館』)。その計算でいけば二〇〇〇円は二〇〇ポンドということになる。深沢俊他編「ロンドン情景」の注参照。
- (12) 「吾輩は猫である」九章、三四―三頁。
- (13) ウルフの日記によると、一九三一年三月二六日にカーライルの家を訪れる予定との記入がある。The Diary of Virginia Woolf, vol. IV (Hogarth Press, 1977; Penguin Books, 1979), p. 13.
- (14) J. A. フルーデ (J. A. Froude) は雑誌 (Fraser's Magazine) の編集者でカーライルの弟子。チェイン・ロウでのカーライルの生活ぶりについては、彼の手によるカーライル夫妻の書簡集(一八八三年)、「回顧録 (Reminiscences)」(一八八一年)、四巻からなる「伝記 (Biography)」(一八八二―四年) が詳しい。
- (15) 「漱石山房蔵書目録」によると漱石はカーライルの「衣装哲学」(二種)、「英雄と英雄崇拜」、「フランス革命」(二種)、「預言者としての英雄」、「過去と現在」を所持していた。正岡子規への手紙にある「カーライルの論文一冊」は「衣装哲学」、「英雄と英雄崇拜」、「過去と現在」を収めた一冊と考えられる。
- (16) 漱石は「余は倫敦滞留中四たび此家に入り、四たび此名簿に余が名を記録した覚えがある」と書いているが、実際に四度訪れたかどうかは不明である。角野喜六著「漱石のロンドン」(荒竹出版、一九八二年)には「カーライル博物館」には四の字が多いので、四度でなくてはならなかったのではないかという興味深い説がある。一六九―七〇頁参照。他に出口保夫著「ロンドンの夏目漱石」(河出書房新社、一九八二年)。
- (17) 夏目漱石全集第一六巻別冊「カーライル蔵書目録」
- (18) 「吾輩は猫である」三四頁。
- (19) 深沢俊他編注「ロンドン情景」の注(p. 86)によれば、カーライルは妻が病弱であったことを「回顧録」の中で述べている。
- (20) ウルフは夫人の手紙について書いたエッセイも書いている。Virginia Woolf, A Woman's Essays: Selected Essays vol. I (Penguin Books, 1993) pp. 54-7.
- (21) 書簡や日記を見ると、漱石はキーツの家を訪れてはいないようである。
- (22) 漱石全集第三巻「日記」明治三四年一月十日。
- (23) 「日記」明治三四年二月十日。
- (24) 「書簡集」及び「日記」によると、漱石は二年間の留学では語学を完全に身につけること、英文学の研究を深めることは不可能と割り切って、書物を買集めることを第一の目的とした。支給される留学の費用(年額一八〇〇円)ではケンブリッジやオックスフォードでの生活に足りないことを知って、滞在地を書店や劇場の多いロンドンに選んだのも、彼流の割り切りである。当時、両大学で相応の学者や学生と交際するには、かなりの金額(漱石は年に四五〇ポンドとしている)が必要だったのは事実である。
- (25) 自家用馬車を持つには少なくとも年収にして五〇〇ポンド以上が必要だった。
- (26) 拙稿「近所の意味するもの——「自負と偏見」再説」(吉田幸子・横山茂雄編「女性と文学」英宝社、二〇〇〇年) 参照。
- (27) 「北と南 (North and South)」は一八五四年から五年にかけてアイケンスの雑誌「ハウスホルド・ワーズ (Household Words)」に連載され、一八五五年に単行本として出版されたものである。

Mrs. Dalloway's London: Woman's View on *Carlyle Museum* by Natsume Soseki

Mari NAKAO

'I love walking in London'. So saying, Mrs. Dalloway walks out into the London streets one fine June morning. She wants to buy flowers for her party by herself. When we consider that until recently women had not been able to walk on her own, out of consideration for safety and respectability, Mrs. Dalloway's freedom and independence are noteworthy.

Virginia Woolf herself loved walking in London. In *The London Scene* (1931-2), a series of five short pieces narrating a imaginary stroll around different areas and aspects of the city, Woolf's feminist eye reveals many unique points in modern city life.

Take 'Great Men's Houses', the third chapter of *The London Scene*, for example. Woolf visits Carlyle's house in number 5 Cheyne Row. Number 5 Cheyne Row is a well-known place and Natsume Soseki visited there four times while he was in London. Mere comparison between these two writers' visiting essays, 'Great Men's Houses' and *Carlyle Museum* (1905), tells us how differently Woolf views this noted place from Soseki. Woolf looks at that four-storied uncomfortable house from a housewife's point of view, that is Mrs. Carlyle's. Hence she says that 5 Cheyne Row is not so much a dwelling-place as a battlefield. On the other hand, Natsume Soseki is contented with an ordinary observation of the famous writer's possessions, which are preserved and exhibited in that house. Woolf's feminist's imagination is obvious.

Her feminine sensitivity throws a new light on familiar things and enlivens much-accustomed London scenes. The sensitive imagination of Virginia Woolf the woman fascinates and attracts us to various scenes of London while Woolf the novelist writes 'walking' novels in which her heroines such as Mrs. Dalloway explore London streets by walking on their own.